©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

史料紹介

東京大学史料編纂所所蔵「弘長三年春日若宮神主中臣祐賢記」（『春日社旧記』のうち巻六）

松村和歌子
藤原重雄

【解題】

春日若宮神主を世襲した千鳥家の旧蔵文書などをまとめた『春日社旧記』に含まれる一巻（貴三八―一―六）で、弘長三年（一二六三）の若宮神主家五代目祐賢の日記。千鳥家は日記の家として知られ（『中臣祐定記』寛元四年〔一二四六〕三月二十三日条）、多くの日記が伝えられ、文永元年～弘安三年（一二六四～八〇）のうち十三ケ年分の『祐賢記』を含む、平安末から鎌倉時代の日記が『春日社記録　日記』一～三（『増補続史料大成』として再刊）として刊行されている。本史料は刊本に未収録の弘長三年の日記で、前後を欠くが、全一六丁分、正月十二日条～四月十三日条が連続して残されており、祐賢の日記としては最も早い年代になる。

永島福太郎『春日社家日記』（高桐書院、一九四七年）二七頁に、「史料編纂所に弘長二（マヽ）年日次記といふ鎌倉末の写本が一冊あり、これは正預方〔引用者補注：大東家・辰市家〕の日記のやうに見受けられるが、未だ詳らかでないので、暫く不問に附したい。」と触れられるものに該当するようである。

現状は巻子装だが、各紙の中央に折目があり、他の神事日記と同様に、元は冊子装であった。紙背は前年の具注暦であるが、順序はすでに乱れており、巻子を一度解体して料紙一枚ごとに翻して折って冊子とし、書写したものである。冒頭には著しい焼け焦げが見られる。

法量、縦二九・一×横（表紙）二九・八、（補紙）二七・〇、①四四・〇、②四三・七、③四三・五、④四三・七、⑤四三・九、⑥四三・八、⑦四三・九、⑧四三・九、⑨四三・七、⑩四二・三、⑪四四・一、⑫四三・七、⑬四四・〇、⑭四三・七、⑮四三・七、⑯（軸直付）四三・三センチメートル。

紙背具注暦の日付は以下のとおり。①九月二十三日～十月十日、②五月二十日～六月八日、③十月十一日～十一月月建、④十一月二十日～十二月七日、⑤六月九日～同二十八日、⑥閏七月二十六日～八月十四日、⑦六月二十九日～七月十六日、⑧閏七月六日～同二十五日、⑨八月十五日～九月二日、⑩暦序～正月五日、⑪七月十七日～閏七月五日、⑫三月二十三日～四月十一日、⑬十一月月建～同十九日、⑭三月三日～同二十二日、⑮四月十二日～五月月建、⑯正月六日～同二十五日。後述のように、別に五月一日～同十九日の一紙が伝わるので、具注暦としては、正月二十六日～三月二日の二紙、九月三日～同二十二日の一紙、十二月

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

八日以降の二紙、合計四紙が所在不明ないし逸失となる。

内容面では、神人の相論に関する記事が多い。正月二十五日条では、若宮神人が案内した参拝者の賽銭を占有したことに関する相論が記され、神人の御師として活躍が伺われる。二月十四日条以降は、鹿殺しを捕らえた者への勧賞銭が、興福寺大衆より神人に賦課されたことに対し、黄衣神人の国弘が黄衣を一の鳥居に懸けて訴訟し、解職された一件が中心となる。神人の身分の表象である黄衣の狩衣を一の鳥居に懸ける訴訟は本記が初見である。二月十七日には、春日社直勤の黄衣神人が一斉に黄衣を懸ける大事件に発展し、三月末には大衆の強い働きかけにより社家が黄衣を取り、事態は収束するが、落書によって張本が探られる一方で、国弘の解職は取り下げられたようで、神人の積極的な抵抗活動が知られる。並行して、新儀の課役や大和国安堵荘に下向した神人への打擲に関する抗議も行われており、社頭での二季法華八講への出仕を放棄しようとしているが、初日の四月九日条に「御神事次第八講日記に有之」に対応する別記は、千鳥家蔵『春日社御八講記』（史料編纂所架蔵影写本［3012-11］）があり、四月九日から十三日の記事を収める。その他、三月十七日条から四月四日条にかけては、山城国吉富荘（富野郷）の白人神人と地頭代との相論がみえ、社家は六波羅探題に参向しており、三月二十三日条の若宮での大般若経供養、四月十三日条の恒例大般若会には法蓮郷民の奉幣があり、若宮拝殿で種々の猿楽物まねが行われた記事や、同じく座次相論における過言など、当時の春日社周辺の様相を知る好史料である。

ところで、お茶の水図書館所蔵成簣堂文庫本には、本記と一具となる断簡一紙が所蔵されている。本所にはレクチグラフ［6800-200-129］を架蔵する。目録から当該史料の箇所を引用すると、以下の通り。

○『成簣堂古文書』（蘇峰先生文章報国五十年祝賀会、一九三六年）

三二八頁、第十八雑文書　其一

三〇　春日社神人等愁状断簡　一巻

首尾欠け、年月不明なり。紙背は、一日より十八日に至る具注暦なり。鎌倉時代中期のものなるべし。

○川瀬一馬編『お茶の水図書館蔵新修成簣堂文庫善本書目』（一九九二年）一二八頁

弘長二年五月具注暦（断簡）　一軸

鎌倉中期写。弘長二年五月の具注暦断簡。（前年弘長元年の書写）。一日より十九日までの断簡一紙。その紙背を用いて興福寺関係の記録を書す。鎌倉中期頃筆。絹表紙新添軸装。

残念ながら、現存部分とは直接に接続せず、後欠部分の何れかの箇所に当たると思われるが、日付は不明である。法量、縦二八・七、横四三・一センチメートル。これも附載した。原本調査・翻刻掲載にあたっては、財団法人石川文化事業財団お茶の水図書館より格段のご高配を賜った。

なお翻刻にあたっては、現在通行の文字に改め、行取りは原本に従った。一行に追い込めない場合は、「として次行末に送った。」は紙替り、』は冊子装での折り目の位置、また傍注では、神主方の大中臣氏、預方の中臣氏は省略している。カラー画像が本所の所蔵史料目録データベースよりも閲覧可能である。奈良国立博物館編『おん祭りと春日信仰の美術』（二〇一一年）№37に掲載。

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

【翻刻】

（後補表紙貼紙外題）「春日社旧記（一二）六」

（貼紙）「春　日　社　旧記」『弘長三年日記』（朱）

（前欠、正月十二日条）

謹上　正預（祐公）殿并殿原御中

追申

若宮神主（祐賢）殿へ同可有御存知候、謹言、

昨日賜　長者（二条良実）宣候テ、今日罷下候、長者宣案文

進上候、兼又明日十三日、可申拝賀候也、以此旨殿

原御中□□□□恐々謹言、

権神主時家

［（焼損ニヨリ見エズ）　　　　］

勧学院政所下　春日社

可早以従五位下大中臣朝臣時家、加補権神主之

職事』

右件人加補彼職畢、任例宜従社務之状、依

長者宣所仰如件、社司宜承知不違失、故下、

弘長三年正月十一日　知院事勘解由判官高橋在判

別当右中弁藤原朝臣（忠方）在判　大膳少進藤原

蔭　子　藤原

一十三日、戌時、○新権神主時家拝賀、大社祝役神主泰尚、禄物

綾白被物一重・膝突白布一段、正預被物一領、○以下権官分絹四丈

給之、不嫌不参仁也、若宮役□□（祐賢）、禄物綾被□□（物一）領・

白布一段、経所ノカサネヘリ畳ノ紫ヲ取出テ用之、祐賢沙汰也、

禄物役子息氏人令退出之後、八種御供令備進之、」（第一紙）

一十五日、松本神主、・ヤ野木能近、社司神主泰尚・正預祐公・権神□□□（主泰道）・

権預祐盛・新権神主時家・次預能延・権預能近・神宮預祐貫・

権預祐継・権預祐家・権預延秀、

若宮役祐賢、氏人祐有・祐俊・祐治、今日田ウヘ也、

一去年十二月晦日夜、一御殿東ノ廊北ノ端ニ、狐西向ニテ以外啼云々、

一十九日、勝願院四足前辺ニテ山人鹿ノ足ヲ打ヲル、郷民沙汰ニテ彼山人ヲハ

公文所へ令申畢、大衆沙汰ニテ○公人ノ手ニ被渡了、鹿ヲハ○当時郷民等守之、

寺林辺ニ願縁房所従云々、

廿一日、御神事如例、社司神主泰尚・権神主泰道・新権神主時家・

権預能近・神宮預祐貫・玄蕃預祐継、

若宮役祐賢、権官祐継、氏人祐有、祐俊、祐治、今日綱結了、

権神主勤、御供并四季八種御供備進之、時家沙汰、』

一今日、（廿）十一日夕、足折タル鹿山フカクハイ入候之上ハ、若宮神主殿御知行ノ山

ニテ候へハ、以神人可被（狼公）守之由、郷民等○申之、返答云、社頭ノ外ハ一切無其例、若

社頭ノ外モオホカウクヒナトモ出来之時、ヒモリニトラスルホト■直ヲ□ツカラ「人自ミ

ニテ野ニ守事ハアレトモ、如此之時ハ郷民守事傍例有其数ト申

之間、無力シテ郷民等守之也、

廿五日暁、彼鹿死去之由郷民申之、返答云於郷民沙汰○別会所へ可申也ト申之、

其後ヒモリニ可取之由申遣了、非番役也、為御山内故也、

一昨日廿四日、若宮神人安国止出仕畢、其故者、去年冬比於大社参人銭一

貫文備進之、即彼安国殿コトニ廿文ハカリヲ令備進テ、残ハ皆給了、

然間大社神人、若宮神人中へ出訴訟也、仍安国ニ彼銭ヲハ大社へ

可出之由、雖相催、一切不可出之由申之、□□（依寔カ）暫ハ安国□□□神人等

令違背畢、其後諸事不沙汰之処、今年正月中旬比、南郷神人春末

於若宮御前、参人所進銭三百文ヲ給之、若宮神人等向□□□

訴訟之処、所詮安国ヲ可被止出仕、然者彼春末［　　　］」（第二紙）

（若）□宮へ可弁進之由、可加沙汰也ト申之、仍若宮神人□祐賢［　］

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

之間、止安国出仕畢、正月廿四日ヨリ、令勘当了、
二月一日、御神事如例、社司神主泰尚・正預祐公・権神主泰道・
新権神主時家・次預能延・権預能近・神宮預祐貫・
玄蕃預祐継・修理預祐家遅参、旬御供後参、・主殿預延秀、旬御供後参、
若宮役祐賢、権官祐継・氏人祐有・祐治・祐俊、
一五日夜、時家東金堂女薪役勤仕、社参有之、祝役神主泰尚
膝突白布一段、若宮役同、
一十日、庚申、御祭御供五ケ度調進之、其後開御戸、正預祐公依所労
不参、仍神主泰尚奉開御戸、但二御殿御戸未時許不開給、仍
権預祐盛参上シテ可奉開之由、神主触之、然間即祐盛参上シテ
有暫奉開畢、其後三四御殿神主奉開テ、如例備神宝畢、
其後若宮御戸奉開テ備神宝了、役送権官延秀、」
氏人祐俊・祐治、
使ノ名字不分明、但内侍少納言内侍云々、弁ハ平少納言ト云々、為異姓之間、
着到殿ヨリ退出、仍直会殿ノクワムハ（イ）ノ事行無之、違例歟、
社司見参、神主泰尚、正預祐公、不参、権神主（×権預）泰道・権預祐盛・
新権神主時家・次預能延・権預能近・神宮預祐貫・
権預祐継・権預祐家・新預延秀、　若宮神主祐賢、
十一日、神宝奉納役人神主泰尚、社司見参夜前（如）、若宮同、
今日御神事如例、社司交名同、
一夜前自大湯屋以中綱二人相弁、今一人不分明、富（山城）野之一神人訴訟事
于今不事行、不日神主・正預・若宮神主三人令京上可訴申也
ト有之、皆領状申了、
一十二日、南門橋与六位橋ト今日ワタスナリ、兼ヨリ於里作之云々、古物ハ（第三紙）」
両惣官分配了、
一（十）□四日、両惣官・祐賢寺家へ烈参、其故ハ三方神人等搦□□（鹿殺）

仁勧賞銭ヲ被宛行神人ハムサウ袮宜国弘自大衆被宛
行之間、黄衣ヲ鳥井ニ可懸之由、及大訴之間、寺家（大乗院尊信）へ
申入之、御返事ニハ大衆ト北（一乗）院家ト問答アリテ事切了、
寺家不可有御口入也ト有之、次日別神人種々申之、所詮
両惣官等能々可加沙汰、暫可相待也ト仰下之、返答云々、
状トシテ拝領仕候テ、ソレニナクサミテ、暫モ可相待候ト申□、
仍状トシテ下給了、
状案文
三方本社神人等訴申勧賞銭被宛行事、両惣官同
若宮神主沙汰、何モ為神人等、向後不成疵之様、衆中ニ可令
申沙汰之状、如件、
　弘長三年二月十五日」
　神主在判
正預代官権預在判
若宮神主在判
一三方神人訴状案
春日本社神人等謹言上
欲蒙早御成敗搦鹿殺仁勧賞銭并安堵庄（大和）下向
神人等蒙刃傷打擲愁訴間事
副進
一通　当衆徒御時関東旅粮免除状案
一通　先任衆徒御時搦鹿殺仁勧賞銭御免除状案
（件）□搦鹿殺勧賞者、専被重神威之故也、然者朝暮□□
致寺社之忠公哉、所詮忝被重神威、於新儀課役□□（第四紙）」
御免除、又於安堵之土民等者、任社例被召禁獄其身、
被懸縁者伴類而欲被遂御祓、仍乍恐粗言上如件、

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

一自社家被進状案
本社三方神人等申状副具書等、令進候、子細見于状候歟、此状最前
可取進候之処、神人国弘解職事御沙汰厳蜜候之上者、
其恐候之間、度々雖訴申候、于今不取申候之処、神人等可
懸黄衣於一鳥井之旨結構之由、承及候、然者後難又
其憚候之間、執申候、以此等趣可然之様、忩々可有御披露
・衆（×候）中候、恐々謹言、
二月十七日　　執行正預祐公
神主泰尚
謹上　別会五師御房
返事別会所
一神人訴状慥以給候了、以此趣蜂起之時早可令申披露
候、恐々謹言、
二月十七日　　別会五師頼算
追申
今朝給候状、令返進候、
一神人寺役免事代々例
鹿殺搦勧賞銭、当社神人之中就任官之輩、可令出之由、依
有其沙汰、神人等欲遁其官歟、太以存外也、凡神人任官
者当社余社之先傍例也、全無隙任官儀、早可令補任
也、保（課）役事一旦雖加催促、訴申之旨依有其謂、既被
免除了、永遠如此新保（課）役所令任（停）止也、僉儀之趣□
如件、
弘長元年七月廿三日　　別会五師在□（判）
一此状令披露候了、評定趣於黄衣本社神人者一定被
免候了、於散所神人・中（×者）於入道神人者無免除之儀、三
方神人之事ハ未事切候也、随重評定之趣可申候、
仍入道神人事者無免儀候也、以此旨可有御下知候也、恐々謹言、
六月十六日　　別会五師犻舜
重申衆徒状
一昨日令申候本社三方神人大訴事、已夜前亥刻、懸黄
衣ヲ一鳥居候了、此条以外事候、以此旨忩可令披露・衆（×候）中
給候、恐々謹言、
二月十八日　　執行正預祐公
神主泰尚
謹上　別会五師御房
追申
昨日神人等訴状同忩可有御披露候、恐々謹言、
申殿下状案
一奏状一通令進上之候、以此旨忩可令披露給候、恐々謹言、
二月十七日　　春日執行正預祐公
神主泰尚
謹上伯耆（式房）前司殿
言上
事由
右去冬之比、為寺使者安堵庄下向神人等、為彼庄土民
被打擲刃傷、并本社神人国弘、為衆徒之沙汰依被解
職、今夜亥刻、傍輩神人等懸黄衣於一鳥□□□
依為重事、言上如件、
二月十七日子刻、　　春日○執行正預祐公
神主泰尚
若宮神主祐賢
一十八日、神主・正預代官祐継、・祐賢花林院へ参上、神人等已黄衣
ヲ一鳥井ニ懸候了之由申之、

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

御返事ニハ、
以外事ナリト有之、今日以廻文触社主等了、随今日戌時、集
会成了、条々及評定也、黄衣ヲ懸事五十三具云々、猶々
懸候由聞之、神人等直屋ニ集テ散々沙汰也、自黄衣不懸
輩ハ皆トラヘテハキトテ一鳥井ニ懸也、スヘテ大社・若宮両方
神殿守并三人(×之外ハ皆)沙汰者外ハ皆ハキカケ畢、ヲノツカラ当番神人
ヲハユルスト云々、勝事也、非番神人不仕也、
社司集会交名
神主泰尚・正預祐公但代祐継、・権神主泰道・八条預祐盛・新権神主時家・』
権預能近但代能兼、・玄蕃預祐継・神宮預祐貫、祐賢、
一十九日、神主社頭宿所ニテ集会、今日自大湯屋以中綱琳実・
忍実被触云、神人国弘依有重科事、已被解職畢、而去御祭
之時も着黄衣随神役云々、此条如何□(様)事哉、次ニハ神人等懸黄衣
於一鳥居之条、頗以不当也、両惣官等一向根ヲシテ如何様セサスル事(訴訟)
顕然也、速今夜之中ニ惣官等沙汰トシテ可被取也、又此神人之中
ニ張本無隠事歟、両惣官・若宮神主沙汰ニテ彼張本輩ヲ
可注申也、凡モ両惣官外ニ(根ヲスル)張本権官等中ニ有歟之由聞之、彼
此早注申ヘシト有之、
廻状云、　神主・正預代官祐継、・祐賢三人対面中綱、
此条畏承候了、先国弘解職之後参社事、粗其由承(×聞)及候之間、
重加下知候了、次ニハ神人等無左右黄衣ヲ懸事、実不当事候、此事(第七紙)」
粗其旨結構ト承候之時者、座上神人等ヲ召寄テ種々ニ教訓[　　　]
キ、即上代も無事ニ候へとも神人等随申請候、於社家沙汰、能々神人等
向後不成疵(キスニ)之様ニ可令申沙汰衆中之由ノ請文ヲ神人ニ下
給候了、此モセメテ為正理不尽(シム)ノ沙汰候、且可有御察候歟、而ニ去十七
「日

此国弘已御使下向シテ罪科之由、神人等承候けるあひた、俄黄衣ヲ
懸候云々、一切其夜事社司等不知及候、次ニハ張本事、神人等集会所
ニハ一切人ヲモ不寄候、社家御使ヲモ不寄候之間、張本不分明候、難治
事候歟、然而各能々ハウヘムヲイタシテ可申左右候也ト申之、
其後神殿守等ヲ皆召取テ、条々衆命ヲ申聞テ、種々ニコシラヘ
雖申、一切訴人之神人等不信用也、猶々重終夜(致)至教訓之処、神人等申云、
所詮今度ハ黄衣ヲ取候テ、暫社家御沙汰於可相待候之由申之、仍
今日廿日、辰時、神人等以直宿人取畢、即両惣官・祐賢寺家へ此旨申、同
花林院へ申之、別会所へ以状申了、彼状案文等如此、実事ハ黄衣ヲハ
猶直屋ニ皆以置之、訴人神人等ハ猶不随神役也、社(×司)家又重神人之
シテ下給了、「中へ請文ヲ』
一殿下ニ申文案文
言上
　　事由
右、去十七日所令言上、依本社神人等訴訟、所懸一鳥居黄
衣、衆徒命厳蜜之間、今朝廿日、先取退了、仍言上如件、
　　二月廿日　　　　　春日執行正預祐公
　　　　　　　　　　　　　　神主泰尚
　　　　　　　　　　　　　若宮神主祐賢
奏状一通令進上之候、以此旨忿可令披露給候、恐々謹言、
　　二月廿日　　　　　　　春日神主泰尚
　　謹上　伯耆前司殿　　　　　　　　　　　　　(第八紙)」
一別会所へ令進状案
先日令申候三方神人等訴訟懇切之余、雖懸黄衣於一鳥居
候、随衆命先取退候了、雖然猶貽訴訟候、相構無神威陵
遅之様得御意、可有御披露衆中候、恐々謹言、

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

二月廿日　　　　　　　　　執行正預祐公

神主泰尚

謹上別会五師御房

一訴訟人神人中へ重下給社家契約状案

依□(三)方本社神人大訴、雖懸黄衣於鳥居、随衆徒御命、已

取退畢、仍於両惣官并若宮神主沙汰、為神人等向後不成

疵之様、今月中可申沙汰之状如件、

弘長三年二月廿日　」

神主在判

正預在判

若宮神主在判

廿一日、御神事如例、社司見参神主泰尚・権神主泰道・権預祐盛・

権預能近・神宮預祐貫・権預祐継・権預祐家・権預

延秀、若宮役祐賢、氏人祐有・祐俊・祐治、権官延秀、

今日神主宿所ニ両惣官・祐賢集会有之、座上神人召寄テ

条々問答、神人中へ下契約状ニ神人国弘ヲ可申沙汰之由、可令書

副給之由申之間、難叶之由、各々申之、仍然者神人等黄衣ヲ又

鳥居□□(懸)□□申テ、散々及沙汰也、」(第九紙)

一廿二日、両惣官・祐賢社頭ニ集会有之、自衆徒以中綱□□今一人ハ不分明、

□□□被仰内ニ、鳥居ニ札ヲ残之条返々不当也、速ニ可被取也、

次ニハ不着黄衣神人等社頭ニワウケム返々不当也、速ニ退出ヘシト有之、

不日ニ召寄神殿守、条々被仰合了、

廿三日、又神主里之宿所ニ集会有之、今日(ヨリハ)札不懸(也)、不着黄衣

事、昨日神人返事不分明之間、今日又重下知了、付是ハ神人ノ

張本事頻自衆徒被責之間、内々神人(主)カ知人ハリマノ君ニ注遣之、

鳥居ニ黄衣ヲ懸神人張本ノ事

ホクカウ

ロクネキ　クワムサウネキ　ヱムワウネキ　キヤウワウネキ

イマシラウ

ナムカウニ

ハルワウネキ　ハルワカネキ　ヤクシネキ　コムスネキ

ワカミヤ　」

ハルイワネキ　コムシラウネキ

□(一)同日、於金堂前一日書写大般若被供養、有御楽云々、書写

事上臈・中臈マテ書之、願主坂ノ竪(堅カ)信房、今法名阿願房、

申上寺家及御沙汰云々、其後亥刻ニ当社若宮ニ奉送、先

拝屋ニ奉置テ、其後経所ニ伝供ニシテ奉納、クロヌリノツシ

ヲ奉安置也、社頭へ持参之時、有御楽也、スノカラヒツニ奉入テ持

参也、供養導師権別当御房(頼円)、寺家も御出仕云々、

一廿四日、猶彼訴人神人ニ速可着黄衣之由、被仰之処、未分明、如何様哉、

今日可申御返事也、忩可申左右之由、両惣官・祐賢以沙汰者責□(伏カ)

也、仍皆(ミナ)ハ黄衣ヲ已令着了云々、

一廿五日、両惣官集会、今日も自衆徒神人張本忩可注

進之由、頻被触遣了、

□□(三月)一日、御神事如例、社司交名、神主泰尚・正預祐公・権預

」(第一〇紙)

祐盛・新権神主時家・権預能近・神宮預祐貫・

権預祐継、権預祐家、権預延秀、若宮役祐賢、権官

役送延秀、氏人祐俊・祐治、今日御後(×背)ニ集会有之、

条々評定、春末三百銭、若宮神人中ニ可弁之由下知、景春(末)

祓祭物可催促事、神人国弘罪科事、可申免衆中事、

信蓮房法橋少便祭物一貫文社司中へ出之事、即彼銭

ヲモテ飯酒ニ可成之由、両神殿守ニ下知了、

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

三日、御節供、福智・アハチ・西殿、社司（×祐賢）社司不参輩、
権神主泰道・次預能延、此外皆参、今日御背ニ集会、代官
祐俊、今日若宮参氏人祐有・祐俊・祐治、
五日、恒例御神楽、社司見参、不参正預祐公、○次預能延、権神主
泰道、若宮役祐賢、権官延秀、氏人祐俊・祐治、
一今夜自大湯屋以中綱二人、山城富野郷神人事ニヨテ
両惣官相共祐賢可令上洛之由催之、領状申候了、
十一日、御神事如例、社司不参、権神主泰道・権預祐盛・次預能延、』
此外ハ皆参、若宮役祐賢、権官延秀、氏人祐俊・祐治、
今日御背集会有之、国弘解職間神人等訴訟事、
一十七日、両惣官・祐賢上洛、其故者、山城国吉富庄白人神人名主正預、
為彼所地頭代、被召籠六波羅了、仍及衆徒沙汰被差上也、
一去月十八日安居房ノツヒチツキハシム、可為国司沙汰之処、法雲院法印
実聖勧進ニテツクナリ、
一今月廿五日、自京両惣官・祐賢下向了、吉富庄西願・阿十等沙汰
已悉令成熟（就）了、此条見于六波羅家状、在京間書状等、同長者宣御
請文案、
春日御社領吉富庄地頭代狼藉由事、社家重申状副衆徒状具書等、
謹下給候了、相尋子細可言上左右候、以此旨可有御披露候、恐々謹言、（第十一紙）」
三月十九日　　左近将監平（北条）時茂在判
此上猶社家西願等ヲ先可免給之由、頻申之、仍已於西願法師ハ
出給了、然而訴訟残之間、以状被申案、
於西願法師者召預了、阿十法師住宅追捕物等間返給、同
并所立御供田点札被上事、如何様可令存知候哉（×候哉）、恐々謹言、
三月廿日　　春日執行正預祐公
神主泰尚

謹上佐治左衛門入道（重家）殿　　若宮神主祐賢
六波羅家御請文申上　長者事
山城国吉富庄白人神人西願法師訴訟事、長者宣御
請文如此、但此上猶令申子細候之間、於西願法師者被召出、已
請取社家候了、以此旨可令披露給候、恐々謹言、』
三月廿日　　春日執行正預祐公
神主泰尚
謹上伯耆前司殿
廿四日、阿十之御供田点札ヲ被上、并追捕物等ヲ可糺返之由、六波羅
領状申了、此上猶於状可給候、長者へも申、衆徒へモ可披露之由
申之間、状トシテ給候了、即状案、
一六波羅参向社司装束事、神主泰尚、狩衣、正預代官祐継、同、
祐賢衣冠ニ下ク、ル也、各中門ニ参向之、奏者佐治入道・得田兵衛
大夫入道此等也、
山城国吉富庄住人西願・阿十等間事、於西願者就　長者
宣先度令召出候了、追捕物歟、并名田事、不論是非、先止
点札、令糺返損物、可令還住本宅之由加下知了、於地頭条々訴訟
者、不日可被遂対決候、仍執進如件、（第十二紙）」
弘長三年三月廿四日　　左近将監在判
春日神主殿
山城国吉富庄白人神人西願・阿十等訴訟事、六波羅状如此、子細見
于状候歟、即去廿七日被糺返追捕物并所立○被上御供田点札候了、以此旨可令○披露
衆中給候、恐々謹言、
四月四日　　春日執行正預祐公
神主泰尚
別会五師御房　　若宮神主祐賢

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

（上部余白）「追申
彼状依遅々于今不申候、御披露之後ハ早々可返給、」
山城国吉富庄白人神人沙汰之間状慥給候了、衆中披露之後、（×可令返）早々可被
〔返進候、恐々謹言、
乃時　別会五師頼真
一去廿一日、酉刻、又依神人国弘訴訟事、神人等懸黄衣於鳥居了、
仍自京都下向後、廿七日各集会有之、神人等集会所宿直屋
ニ落書出来トテ、神人等可被申寺家トテ出之案文、
コノキシヤウヲヒロウセテ、ヒキカクシテムトモカラハ、タウタイニハ、タイミヤウ
シム七堂サムホウノニクマレヲカフリテ、ヌスミカウタウシテトラヘカラ
メラレテ、（×コ）ツメヒトヒニヒトツ〳〵ハナタレテ、ノコキリニテクヒヲキラル、ホウ
ヲエヨ、コシヤウニハ、ムケムチコクヘヲチテ、ナカクアカラサルホウヲエヨ、』
シムニムノナカヘ
敬白
起請文事
右社司等、蒙満寺衆議云々、解神人職事、申正権（雅縁・信憲）別当、触五師
三綱、并依衆徒議定、宜致其沙汰、縦有貴所権（門）朋之命、容易
不可解其職之由、可令書進二通起請文、於一通者可籠社壇、於
一通者可納別会所櫃云々、仍任仰旨起請如右、若背起請之
旨致自由沙汰者、社司等可罷蒙七堂三宝五所権現御
罰状如件、敬白、
建暦三年潤九月廿一日　御社司等敬白
権預中臣連延忠在判
次預中臣連能□（行在判）□□（第十三紙）」
（×七）六日、自衆徒以中綱幸賢・賢忍被触□、神人等黄衣ヲ懸事、
可取退之由、度々被仰了、而于今不取之之由、如何様事哉、又三人之
沙汰者可進之由、同被仰之処、未進候条以外事也、ト有之
御返事云速付十二人神殿守只今可被取黄衣也ト有之、御返事ニ云、
可取退黄衣之由事、度々令下知候、然而未事行候、忩仰付神殿守
可退之由、可下知候、又三人沙汰者ハ忩可進候也、申之、此之由神殿守ニ
令下知之処、重又御使有之、被仰云、只今返状只先々ニ不相替、所詮
御使ニ十二人ノ神殿守ヲ相副テ可被取之由、被触也、仍神殿守皆
召寄テ中綱二人ニ付進之、其時張本訴人ノ神人等七・八人
不（可）取之由申テ馳向也、以外勝事也、但六道橋ノ辺マテ向テ
立返了、其時神殿守等黄衣ヲ取了、宿直屋ニ取置云々、
両御所へ令申了、
七日、両惣官・祐賢集会、神人等申云、随衆命已昨日取退黄□（衣）
候了、此上ハ御八講以前ニ国弘ヲ以被召出、并神人等新儀□』
ヲ被免除、同安堵庄下向神人打擲刃傷訴〔訟〕随事、可蒙
御裁敗候、若其難叶候者、御八講御神事ニ不（可）随候之由
申之、仍別会五師許へ各参テ申付了、但条々事書ヲ
可給之由、別会所令申之間、申遣之、
注進
一神人等可被新儀課（×役）免役事　一国弘可被召出事
一安堵庄下向神人〇（打）擲刃傷訴訟事
右見参之時、委細令申候了、
一同夜、若宮御前ニ延年有之、菊一殿与遍善〔真カ〕院法印御房尊海、
遂宿願云々、
一八日夜、両惣官・祐賢代官祐治参寺家、其故ハ神人等明日御八講（第十四紙）」
御神事不可随旨之申切之間、□（令）烈参之、然而猶不可及御口入之由
被仰出也、別会五師参会寺家之次、□日三ヶ条事御返事ト
テ申之、神人等新儀保〔課〕役事并安堵庄下向神人〇（打）擲刃傷事ハ

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

可有御沙汰、国弘被召出事ハ勿論事也ト有之、衆徒御返事如此、
一九日、御八講初日、御神事次第八講日記ニ有之、神人等神殿守之外ニ
三方ヨリ十人ヲ被免出之、其外ハ皆以不着黄衣也、今日衆徒
御返事趣令披露神人中了、然而不罷出也、但夕ニ成テ中郎或
神人引テノキ畢云々、同春遠張本ノ中ヲ罷出了、
（十）□日、同彼中郎或神人・同春遠等可随神事之処、張本神人等令鬱（イキトヲテ）之間、
暫トテ今日不出仕也、
十一日、御神事如例、為御八講之間、早旦ニ御供備進之、社司皆参、
［若宮役祐賢、役送延□、
其後御八講被行之、委細事ハ八講日記ニ有之、　氏人祐俊・祐治、
十二日、張本神人等罷出テ、随御八講御神事畢、仍中郎或神人皆以参勤、
十三日、御八講結日無違也、但寺家御上洛、仍今日ハ無御出仕也、（後嵯峨）仙
故ト云々、　［洞□□］
同日夜、一切経蔵前ニ権官等各集会有之、春遠関東下向之時
粮米付両惣官責之、
一恒例大般若会、御神事如例、於直会殿請僧等着座、朝座夕
座間ニ法蓮郷民等奉幣、殿別ニ白絹ヲ御幣ニ懸テ備進
云々、社司配分、若宮ニハ巻染ノ絹ヲ懸テ備進之、祐賢大社ニ
祇候之間、以代官祐俊令進之、其後於拝殿種々ノ猿楽物ノマネ
ヲシテ返了、
一今日成政与泰長座論、散々及過言、牛買ナトイフ事ヲ泰長
申懸之、成政種々返答、此事ニヨテ泰長父権神主泰道与
成政舎弟（朝成）ノ相互ニ令放言了、依此事御神事之後、御背ニ社司
集会有之、於氏人身社司両惣官於散々及過言之条、為向後
不便事也、可有沙汰之由、議定了、
一今日同氏人等一烈集会有之、其故ハ去御八講中始日九日、一御殿（第十五紙）」
御間ニテ能定得朝成酒器畢、而彼朝成ハ去年比為寺□
クスリヲク、メラレタル依為仁、彼酒器□得タル能定（酒器）ノヲモ□
ラウテ、次日十日泰長不得也、此之間件能定トカメテ散々放言之
内、当社氏人皆以或ハ人殺（或）ノ盗人、不付疵物（モノ）無之、而能定■之
酒器ヲ被嫌之条不当也ト申之、依此事ニ一社氏人等為
訴訟集会ヲ成了、
一十六日、依神人訴訟事、神主許ニ両惣官・祐賢集会有之、
別会所ヘ遣状案文、
本社神人等訴訟事懇切之余、及二ケ度雖懸黄衣於
鳥居、依難背衆徒御命取退黄衣、恒例御八講并大
般若会御神事等無違乱令勤仕候了、此上者新儀保役（課）
停止事、可有御計之由、先度蒙仰候歟、然者被裁（×載）下□
状候之条、尤社家可為面目候、且奉復神威、且乗□
慈悲、有御裁敗之様、得御意可有御披露衆（中）□
候、恐々謹言、
四月十六日　　春日執行正預祐公
神主泰尚
若宮神主祐賢
謹上　別会五師御房
今日同衆徒御使有之、被触云、去御八講中ニ着黄衣神人於
少々ハ■（キ）トリタル神人有之歟ト被聞食、其張本可注申、又
黄衣ハカレタル仁タレ〱ト同可注進之由有之、御返事云、分明ニ
相尋テ可注申之由申了、而祐賢申云、黄衣ヲハキ候方ニハ
一切ニ若宮神人不候、御八講以前マテハ（張行者）ノ一人候シカトモ、引テノキ候畢、
黄衣ハカレタル神人ハ一人候歟之由承及候、分明ニ相尋テ可注申□（第十六紙）」
申之、両惣官・祐賢於一所問答、
（後欠）

©2013 Historiographical Institute(Shiryo Hensan-jo)The University of Tokyo

【附載】お茶の水図書館成簣堂文庫所蔵「春日社神人等愁状断簡」

（前欠）

人神奴同可有御哀（アヒ）憐、豈為被優神鹿可□□□□□
歎給哉、凡神人者雖不預絹塵之給物、鎮励寺社之給仕□□（致）
昼夜之格勤僅以遁如此之保（課、下同ジ）役、為身之勇、而今如此保役
出来者、非失只奉公之慕兼、悲神威之廃怠者也、況数多神
人御寺御使而在京頻也、為粮米毎度汎負物而雖昇□
放無不便之御計、加之為衆徒之御使、棒御下文、公人相伴
下向于泉洲・江洲等之時、被折神木蒙刃傷、而雖令愁
訴未蒙御成敗而令愁吟之処、又去年冬之比、為御寺
御使安堵庄可昇（罷）向之由蒙仰之間、前々雖失面目、依難
背衆命、愁以下向、然又被折（折）打擲刃傷了、然而于今無御
沙汰、是偏神威々衰弊之基（榊カ）歟、歎而有余、如此捨身
命走仕神人須有抽賞之処、剰蒙新儀責之条、愁吟」
尤切也、就中神人等者貪道無窮、殆有失活計之類、争無
御優免乎、彼飢饉之地、為御寺御沙汰、楽所下人等雖預
給物、神人独無御憐愍、其恨尤深、弥所増愁歎也、定有御
賢察歟、凡夫折神木、神人被打擲刃傷了、然而于今無
御沙汰之間、失面目而令愁歎之処如此、又預新儀譴責
之条難堪子細也、且次（吹）田御庄御訴訟之時、関東下□（向）
之粮米雖被宛散所之神人、無先例之由開申之間、蒙
御免除了、若宮神人同被免除之由令訴申之日、依有
其謂被止譴責而忝蒙御免除了、凡近来当社神人
動失面目之間、神人遂年而減少、且若宮御祭之時□（所）
□（見）也、豈非神威之陵遅乎、然猶如此蒙譴責者、以何□」

（後欠）